論　文

成人期の性的マイノリティ（LGBT）に関する アイデンティティ発達研究の概観
―欧米諸国における実証研究のスコーピングレビュー―

京都大学大学院教育学研究科
博士後期課程 2 回生　上　田　裕　也

An Overview of Gender and Sexual Identity Developments among Lesbian, Gay, Bisexual, and Transgender Adults
－A Scoping Review of Empirical Studies in Western Countries－

UEDA, Yuya

キーワード：性的マイノリティ、成人期、アイデンティティ発達
Key Words：Gender and Sexual Minority, Adulthood, Identity Development

Ⅰ　問題と目的

性的マイノリティとは

近年、性的マイノリティに対する社会的関心が高まり、わが国でもその存在や課題が徐々に認識されてその心理的支援の必要性が指摘されている（葛西, 2023）。一般に多数派である性的マジョリティは「異性愛者かつ出生時に割り当てられた性別と性自認が一致している者」であるのに対し、性的マイノリティとは性的マジョリティではない人の総称、すなわち「出生時に割り当てられた性別、性自認、性的指向の 3 つの組合せに関するマイノリティ」（石丸, 2022）を指す。ここでいう性自認（gender identity）とは、本人が主観的に実感している性別のことを指し、出生時に割り当てられた性別と性自認が一致している場合はシスジェンダー（cisgender）、一致しておらず出生時に割り当てられた性別とは異なる性別を自認している場合はトランスジェンダー（transgender）、男女という性別二元論（gender binary）ではない無性というあり方の X ジェンダー（X gender）やノンバイナリー（nonbinary）、両性というあり方のバイジェンダー（bigender）があり、これら出生時に割り当てられた性別と性自認との組合せのマイノリティをジェンダー・マイノリティ（gender minority）と呼ぶ。次に、性的指向（sexual orientation）とは、性的魅力や恋愛感情をどの性別に対して感じるかという方向性のことを指し、異性愛、同性愛（男性の場合はゲイ[gay]、女性の場合はレズビアン[lesbian]）、男女両性に対して感じる両性愛（バイセクシュアル[bisexual]）、性愛や恋愛の感情を他者に抱かない無性愛（エイセクシュアル[asexual]）、対象を男女に分けて考えない全性愛（パンセクシュアル[pansexual]）があり、これら性自認と性的指向の組合せのマイノリティをセクシュアル・マイノリティ（sexual minority）と呼ぶ。以上のジェンダー・マイノリティ

とセクシュアル・マイノリティの 2 種を総称して性的マイノリティと呼んでいる（石丸, 2022）。最近では、同性に対して性的指向を持っていたり同性と関係を持ったりする人を指すクィア（queer）、自分の性のあり方を決めない人や探している人を指すクエスチョニング（questioning）を Q とし、これら以外にもさらに多様な人がいることを示す+を付して LGBTQ+と呼ぶことも多い（葛西, 2023）。

本稿では、これら多様な性的マイノリティのうち、これまで比較的知られ研究蓄積のあるレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー（LGBT）を対象とする。

マイノリティ・ストレスと性的アイデンティティ

性的マイノリティは差別や偏見に慢性的にさらされるマイノリティ・ストレスにより、メンタルヘルスの問題を引き起こしやすい（Meyer, 2003）。Meyer（2003）はマイノリティ・ストレスを「スティグマのある社会的カテゴリーに属する個人が、マイノリティの立場にあることが原因で受ける過剰なストレス」と定義し、実際、性的マイノリティは異性愛者と比べて、気分障害、不安障害、物質使用障害になる確率が障害において約 2.5 倍高いことが明らかになっている。このほか、多くの研究において、性的マイノリティは自殺念慮を含むメンタルヘルスの問題を抱えていることが示されている（Frost et al., 2013; Hatzenbuehler et al., 2008; Pachankis et al., 2015; Shilo & Savaya, 2012; Starks et al., 2013）。このため、心理臨床家は性的マイノリティの心理臨床実践にあたり、マイノリティ・ストレスに配慮することが求められる（APA, 2021）。性的マイノリティにとって、自らの性的アイデンティティを受容していく過程はライフイベントの中で最も危機的な体験の 1 つであるとされるが（宮腰, 2012）、こうした危機をうまく乗り越え、性的マイリティとしての肯定的なアイデンティティを形成することがメンタルヘルスの問題の予防につながることが指摘されている（Rosario et al., 2011）。

性的アイデンティティ発達モデルにおける成人期

欧米における性的マイノリティの心理臨床実践では、同性愛者の性的アイデンティティ発達のモデルがしばしば援用されてきた（平田, 2014）。わが国においても、性的マイノリティのクライエントが直面している問題を適切にアセスメントしやすいことなどから、同モデルの理解は心理臨床実践において有効であると考えられる（葛西, 2023）。よく知られている同性愛者の性的アイデンティティ発達のモデルは Cass（1979, 1984）や Troiden（1979, 1989）のものである。いずれのモデルも概ね、自らの行動や関心が同性愛的であることに気づいて混乱し孤立感を感じるが、他の同性愛者と接触していく中で自身が同性愛者であることを徐々に受容し、同性愛者であることを肯定的に意味づけて自分のアイデンティティとして統合していくという過程を辿る。こうした過程は、主に性的な関心が高まる思春期や青年期に起こると考えられている（Martin et al., 2002; Money, 1988）。これらモデルは Erikson のアイデンティティ発達モデル（Erikson, 1959/1973）のように、一連の段階を順に経ていく段階モデルアプローチが採られている。Erikson はアイデンティティの確立を青年期の課題として重視した一方、「アイデンティティ形成そのものは青年期に始まるわけでも終わるわけでもなく生涯続く発達過程である」とも述べている（Erikson, 1959/1973）。これに関連して岡本（1994）は、アイデンティティ生涯発達論の観点から、青年期に一旦確立したアイデンティティはその後の中年期や老年期に再び問い直され、螺旋式に成熟してい

くと指摘している。この点、D'Augeli（1994）も性的マイノリティのアイデンティティについて、社会や環境条件に応じて一生を通して変化すると指摘している。以上を踏まえると、性的マイノリティのアイデンティティに関する実証研究は、性的な関心が高まりかつアイデンティティ確立を主な課題とする青年期を対象とすることは当然重要であるが、青年期だけに限らず、一生を通してどのような変化がみられるかを明らかにするためには、その後の成人期をも対象として研究が行われることが重要であると考えられる。

本稿では、成人期を対象とした性的マイノリティに関するアイデンティティ発達の実証研究を概観する。これまで得られている知見を整理した上で、リサーチギャップ（今後の研究課題）を特定することを目的とし、スコーピングレビューを行った。本稿は、心理臨床実践における成人期の性的マイノリティのクライエント理解に資するという意義があると考えられる。

Ⅱ　方法

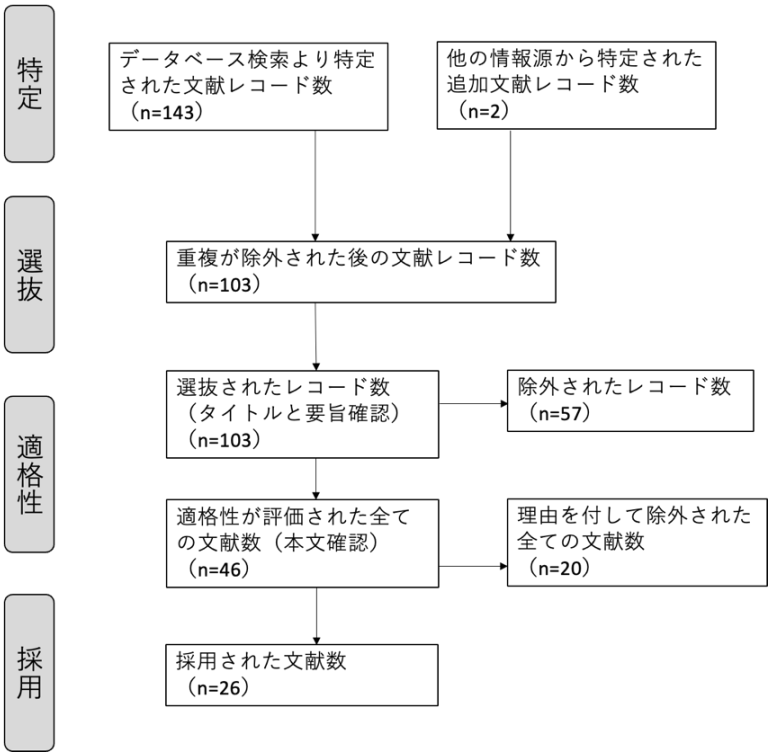
本稿では、スコーピングレビューのガイドライン（沖田ら, 2021; 友利ら, 2020）に則って海外文献を対象に同レビューを実施した。スコーピングレビューとは「幅広い文献を概観（マッピング）することで、現在行われている研究を網羅的に調査し、研究が行われていない範囲（リサーチギャップ）を明らかにすること」を目的とした比較的新しい文献レビューの手法である（沖田ら, 2021）。従来型のレビューはナラティブレビューと呼ばれ、文献検索やデータ抽出の方法は明確に規定されているわけではなく著者に一任されており、総論や解説記事などが相当する。次にシステマティックレビューと呼ばれるものは実施前に厳格なプロトコルを作成してデータベースに登録し、再現可能な形で文献の検索や選択を行い、個々の論文の質を評価し、最終的には得られた結果を統合して要約を作成するものである。これらに対してスコーピングレビューは、ナラティブレビューとシステマティックレビューの中間に位置し、事前にプロトコルを作成するがデータベースへの登録はなく、個々の論文の質の評価は任意で、幅広い知見を素早くまとめ、網羅的に概観することが主な目的となる（友利ら, 2020）。

本稿におけるリサーチクエスチョン（研究疑問）は「成人期を対象とした性的マイノリティ（LGBT）のアイデンティティ発達の実証研究ではこれまでどのような研究がなされ、得られている知見は何か？」である。本稿では性的マイノリティのうちこれまで比較的知られ研究蓄積のあるレズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー（LGBT）を対象とした。成人期は、青年期（adolescent）、若年成人期（emerging adult / young adult）、高齢期（older adult）を除く 30〜64 才と定義した。30 才以上とした理由は、性的マイノリティとして自認に至る過程をテーマの中心とする青年期を対象とした研究の多くが 10〜20 代を調査対象としており、それら青年期の研究を除外するためである。スコーピングレビュー実施時に定義する PCC（Patient, Concept, Context）は、Patient : 30〜64 才の性的マイノリティ（LGBT）、Concept : アイデンティティ発達、Context : 指定なし（海外）とした。データベースは PubMed と Web of Science を用いた。ガイドラインに従い、まず「LGBT AND adulthood AND identity」で検索（データベース検索）、次に検索された論文のタイトルや抄録のキーワードを分析してその他の語彙を含めて検索（キーワード分析）、最後に検索された論文の引用文献をもとに追加情報を検索（引用文献調査）する 3 段階で行った。PCC を幅広く包含し、人的・時間的制約内で実現可能な範囲での文献数が

ヒットするよう修正を重ねた。最終的な検索式は「(gay[tiab] OR lesbian[tiab] OR bisexual[tiab] OR transgender[tiab] OR LGBT*[tiab] OR GLBT*[tiab] OR queer[tiab] OR homosexual*[tiab] OR “sexual minority”[tiab] OR “gender minority”[tiab]) AND (adulthood*[tiab] OR adult*[tiab] OR “middle age”[tiab] OR “middle adulthood”[tiab] OR “middle adult”[tiab] OR midlife[tiab] OR middle[tiab]) AND (“identity formation”[tiab] OR “identity development”[tiab]) NOT (adolescent*[ti] OR adolescence[ti] OR young[ti] OR youth[ti] OR “emerging adult*”[ti])」を用いた。[tiab]を付さない場合、青年期対象の性的マイノリティ研究がほとんどを占める膨大な数がヒットしたため、[tiab]を付し、さらに青年期を除外するための NOT 検索を追加した（[tiab]はタイトルまたは抄録指定、*は変化指定）。最終検索日は 2023 年 10 月 22 日だった。

Ⅲ　結果

レビュー対象となった 26 文献は、発行年は 2001～2023 年、調査対象国は米国（21 件）、イスラエル（2 件）、英国（1 件）、メキシコ（1 件）、オンラインを通じた世界各国（1 件）で、欧米諸国への偏りがみられた。調査対象の性的指向・性自認は LGB（11 件）、T（7 件）、LG（2 件）、GB（2 件）、G（2 件）、LB（1 件）、B（1 件）だった。研究法は量的研究（18 件）、質的研究（8 件）だった。調査協力者の平均年齢は、30 才以上を含む研究のみを対象としたにも関わらず 20 代（4 件）があり、そのほか 30 代（12 件）、40 代（6 件）、50 代（1 件）、記載なし（3 件）だった（図表 1、図表 2）。データ抽出の結果は文献要約表（図表 3）として掲載した。本レビューにより得られた知見について、以下の通り分類して述べたい。



図表 1　文献検索フローチャート

採用基準	除外基準
・30-64才を含む	・HIVのみを対象
・性的マイノリティ（LGBT）	・文学・歴史研究
・アイデンティティ発達	・レビュー、書籍、議事録
・実証研究	
・査読つき論文	
・英語	

図表 2　採用・除外基準

項番	著者、年	対象			デザイン、募集方法		目的、主な発見
1	Calzo et al. (2011)	LGB	年齢：18-84才 M=49.31、 SD=12.25	N=1,260 性的指向：73%ゲイまたはレズビアン、27%バイセクシュアル 性別：674人男性、586人女性 人種：83%白人、8%ヒスパニック、5%黒人、3%アジア系または太平洋諸島出身 場所：米国カリフォルニア州	量的研究 （コホート）	・電話面接 ・州の健康調査	目的：マイルストンへのコホートの影響を明らかにする。 (1)初めて同棲に性的に惹かれた年齢、(2)初めてLGBと自認した年齢、(3)初めて同性と性的経験をした年齢、(4)初めてカミングアウトした年齢、の4つの指標について調査したところ、概ね思春期に経験していることが多く、コホート効果は少ない。他方、少数ではあるが30代以降に経験している者もいた。
2	Campbell et al. (2023)	LGB	年齢：19-54才 M=27.5	N=36 性的指向：26人ゲイまたはレズビアン、5人バイセクシュアル、5人クィア 性別：20人男性、11人女性、5人ジェンダークィア 人種：7人白人、9人ラテン系、9人アジア太平洋系、5人黒人、6人混血 場所：米国	質的研究	・面接 ・性的マイノリティ世代別調査	目的：性的アイデンティティ発達におけるインターネットの重要性を明らかにする。 インターネットの役割は、(1)性的アイデンティティと性についての学習、(2)ポルノ閲覧、(3)肯定的なコミュニティの発見、(4)初期の恋愛や性的経験の促進だった。インターネットが性的アイデンティティの形成に役割を果たしていると説明した人のほとんどは若年成人だった。
3	Dirkes et al. (2016)	LB	年齢：18-83才 M=35.63、 SD=11.94	N=820 性的指向：80%レズビアン、16%バイセクシュアル、4%クィアなど 性別：女性 人種：37%白人、35%アフリカ系、25%ラテン系、3%その他 場所：米国シカゴ	量的研究	・面接 ・女性健康生活調査	目的：マイルストンと希死念慮との関係を明らかにする。 青年期に初めて性的アイデンティティに気づいた女性は、成人期に気づいた女性よりも生涯に亘り希死念慮を抱く確率が高かった。その後に続くマイルストン（自認、カミングアウト）の経験年齢の若さは希死念慮とは関連していなかった。親のサポートは独立して希死念慮と関連していた。
4	Eisenberg & Zervoulis (2020)	T	年齢：36-54才 M=46.33	N=6 性的指向：不明 性別・性自認：MTFトランスジェンダー 人種：不明 場所：英国ロンドン	質的研究	・面接 ・LGBT団体、SNS	目的：医療処置を受けた成人トランス女性を対象にトランス・アイデンティティの複雑さを明らかにする。 成人期のトランス女性は、(1)周囲との「違いを感じる」、(2)性別役割の社会への「適応」、(3)自らのジェンダーの「探索」、(4)インターネットなどで情報を得て「カミングアウトと性別移行」、(5)内面のアイデンティティと外面のイメージを調和させる「真正性」の段階を歩んで性別移行に至っていた。
5	Elizur & Mintzer (2001)	G	年齢：23-72才 M=32	N=121 性的指向：ゲイ 性別：男性 人種：95%ユダヤ人 場所：イスラエル	量的研究	・郵送 ・ゲイ団体、イベント、新聞広告	目的：アタッチメントの内的作業モデル、家族や友人のサポートが、性的アイデンティティの自認、自己受容、カミングアウトにどう影響しているかを明らかにする。 自己受容と友人のサポートが大人の親密な関係における安定したアタッチメントを予測し、自認と家族や友人からのサポートがカミングアウトを予測することを示した。
6	Factor & Rothblum (2008)	T	年齢：18才以上 M=44.6、 SD=11.7	N=166 性的指向：MTFの44%バイセクシュアル、33%レズビアン、27%ヘテロセクシュアル。FTMの69%クィア、33%ヘテロセクシュアル、20%ゲイ。 性別・性自認：50人MTFトランスジェンダー、52人FTMトランスジェンダー、64人ジェンダークィア 人種：MTFの88%白人、FTMの86.3%白人、ジェンダークィアの95.1%白人 場所：米国	量的研究	・オンライン ・質問紙	目的：成人トランスジェンダーのカミングアウトの程度とコミュニティへの参加程度を明らかにする。 MTFとFTMのマイルストンの経験年齢には差があった。自認はMTFはFTMより早いが、他者に表現するのはFTMよりかなり遅かった。LGBコミュニティには中程度のあるいは強い繋がりを感じていた。
7	Fiani & Han (2019)	T	年齢：24-53才 M=32.07	N=15 性的指向：8人クィア、3人パンセクシュアル、2人ヘテロ、2人ゲイ・レズビアン 性別・性自認：3人MTFトランスジェンダー、3人ノンバイナリー、3人FTMトランスジェンダー、2人ジェンダークィア、4人その他 人種：7人白人、3人ミックス、2人黒人、2人アジア系、1人ヒスパニック、ラテン系 場所：米国ニューヨーク市	質的研究	・面接 ・SNS	目的：インタビューによりトランスジェンダーのジェンダーアイデンティティに関する微妙な差異を含む包括的な概念化を導く。 従来の研究と異なり、年代、身体的移行、アクティヴィズムよりも、有益かつ困難なさまざまな要因が強い役割を果たしていることが示された。また、バイナリーとノンバイナリーの語りは類似点は多いが、「パスかブレンドか」という概念、性自認と性的指向の交差性、アイデンティティのカミングアウトなどは双方の間で語りが異なっていた。
8	Floyd & Bakeman (2006)	LGB	年齢：18-74才 男性M=36、女性M=33	N=767 性的指向：93%レズビアンまたはゲイ、7%バイセクシュアル 性別：54%男性、46%女性 人種：76%欧州系白人、11%アフリカ系黒人、13%その他 場所：米国アトランタ	量的研究 （コホート）	・質問紙 ・プライドイベントの出展ブース	目的：マイルストンと歴史的背景の関連を明らかにする。 若年コホートは、カミングアウトの早期化、同性との性行為を試す前に性的指向を自認していること、異性間の初めての性的経験が早期化していることが示唆された。
9	Ghavami et al. (2011)	LG	年齢：18-76才 M=32.73, SD=11.97	（研究1,2は民族マイノリティ、研究3は性的マイノリティ） N=498（研究3） 性的指向：281人ゲイ、217人レズビアン 性別：281人男性、271人女性 人種：83%白人、3.5%アフリカ系、3.5%ラテン系、1.5%アジア系、8.5%その他 場所：米国	量的研究	・オンライン ・LG団体	目的：アイデンティティ達成と心理的幸福の関連を明らかにする。 アイデンティティの達成（自分のアイデンティティの意味を探求し理解すること）と心理的幸福との関連は、アイデンティティの肯定（肯定的な感情と自分の社会集団への帰属意識の発達）によって媒介されることを示した。
10	Grov et al (2018)	GB	年齢：19-80才 14%=19-25才、28%=26-35才、20%=36-45才、19%=46-55才	N=1,023 性的指向：95%ゲイ、5%バイセクシュアル 性別：男性 人種：71%白人、13%ラテン系、8%黒人、8%その他 場所：米国	量的研究 （コホート）	・オンライン ・全国縦断調査	目的：最新のデータを用いて、マイルストンへのコホートの影響を明らかにする。 出生コホートは、男性が同性に最初に性的魅力を感じた時期とは無関係（年齢中央値は11～12歳）だが、その年齢を除けば、高齢のコホートは若年のコホートよりも遅い年齢でアイデンティティ発達の指標となる出来事を通過する傾向があった。
11	Halpin et al. (2004)	G	年齢：12-64才 M=29.2	N=425 性的指向：ゲイ 性別：男性 人種・国籍：241人米国、109人豪州・NZ、24人欧州、19人英国、16人カナダ、11人アジア、5人ラテンアメリカ 場所：世界中（インターネット）	量的研究	・オンライン ・インターネット広告	目的：Cassモデル(1979)の6段階の各段階は、心理社会的変数（幸福、悲しみ、生活満足、孤独、自尊心）とどのように関連しているかを明らかにする。 発達過程の各段階はU字型に関連していた。すなわち、初期の「混乱」「比較」の段階で高く、中期の「寛容」と「受容」の段階では低下し、後期の「プライド」と「統合」の段階では再び高くなった。
12	Haltom & Ratcliff (2021)	LGB	年齢：18才以上 33%=34才以下 34%=35-54才 33%=55才以上	N=1136 性的指向：396人ゲイ、270人レズビアン、342人バイ女性、127人バイ男性 性別：46%男性、54%女性 人種：76%白人、10%ヒスパニック、7%黒人、7%その他 場所：米国	量的研究	・オンライン ・LGBT成人調査回答者を対象に電話調査	目的：マイルストンと性別、人種、教育歴との関連を明らかにする。 女性は男性より自認やカミングアウトが遅い。大学教育を受けた人は大学期間にカミングアウトすることが多い。黒人は自認とカミングアウトのタイミングにばらつきがある。
13	Ifrah et al. (2018)	LGB	年齢：18-83才 ゲイ男性 M=38.5,SD=14.43、バイ男性 M=35.94, SD=13.05	ゲイ男性N=368、バイ男性N=137 性的指向：ゲイ、バイセクシュアル 性別：男性 人種：イスラエル人 場所：イスラエル	量的研究	・オンライン ・質問紙	目的：「経験への開放性」の気質は、自己受容と自己開示と関連があるかを明らかにした。 バイ男性は経験への開放性が高かった。ゲイ男性は経験への開放性が高いとは言えなかった。経験に対する開放性は、バイ男性は自己受容と正の相関を示したが、ゲイ男性の間では示されなかった。

図表 3　文献要約表

項番	著者、年	対象			デザイン、募集方法		目的、主な発見
14	Ikizler & Szymanski (2014)	LGB	年齢：18-52才 M=26.6,SD=9.06	N=12 性的指向：7人ゲイ、1人レズビアン、2人バイセクシュアル、1人クィア、1人パンセクシュアル 性別：8人男性、4人女性 人種：中東・アラブ系 場所：米国	質的研究	・電話またはビデオ面接 ・LGBT団体、メール	目的：米国に住む中東・アラブ系のLGBのアイデンティティ発達の理解を深める。 米国に住む中東・アラブ系のLGBに対するアイデンティティ発達に関する語りから、交差性、人種・民族、性的アイデンティティ発達、差別、スティグマ、抑圧、不可視性などに関連するテーマが抽出された。
15	Johns & Probst (2004)	LGB	年齢： M=34.14, SD=6.91	N=143 性的指向：30.1%ゲイ、58%レズビアン、2.8%バイ 性別：31人男性、107人女性、5名その他 人種：84%白人、4.9%ヒスパニック・ラテン系、2.8%ネイティブアメリカン、8.4%黒人、アジア系、その他 場所：米国	量的研究	・質問紙 ・LGBソフトボール大会	目的：Cassモデル(1979)の妥当性を検証する。 Cassモデルのような複数の線形段階ではなく、2 つの時期が発生することが示唆された。2つの時期とは、性的指向が自己アイデンティティに「統合されていない」感覚の時期と、「完全に統合されている」感覚の時期だった。
16	Katz-Wise & Budge (2015)	T	年齢：44-67才 M=50.37, SD=7.04	N=13 性的指向：5人バイ、3人レズビアン、2人ストレート、1人パンセクシュアル、1人ほぼアセクシュアル、1人クエスチョニング 性別・性自認：トランス女性 人種：11人白人、2人白人とネイティブアメリカンのミックス 場所：米国中西部	質的研究	・面接 ・チラシ、メール	目的：中年期のトランス女性が行なった性別移行のプロセスを明らかにする。 語りから、認知プロセスと対人関係プロセスの2つのテーマが浮かび上がり、トランスジェンダーのアイデンティティ発達と性別移行プロセス全体を通じて顕著性が異なっていた。認知プロセスは移行の初期と後期で顕著だったのに対し、対人関係プロセスは移行の中期で顕著だった。
17	Kim & Epstein (2018)	LGB	年齢：18才以上 M=30.6, SD=9.8	N=298 性的指向：39.6%ゲイ、24.5%レズビアン、16.1%クィア、11.4%バイセクシュアル、8.4%その他 性別：47.5%男性、52.5%女性 人種：アジア系米国人 場所：米国	量的研究	・オンライン・オフライン ・全国社会正義セクシュアリティ調査	目的：アジア系米国人LGBを対象に、人種・民族コミュニティにおける経験と幸福感との関係を明らかにする。 ポジティブ感情の低さを通じて、人種・民族コミュニティにおける不快感が自己申告の健康に及ぼす間接効果、および二重アイデンティティを重要だと認識している人とそうでない人の違いを調査したところ、低いポジティブ感情は部分的に直接効果を媒介した。二重アイデンティティを重要だと報告した人は間接効果が有意だった。
18	Lever et al. (2008)	LGB	年齢：19-94才 ゲイM=34.9, SD=9.5, レズビアンM=37.1, SD=11.7, バイ男性M=39.3, SD=11.5, バイ女性M=32.4, SD=10.5	N=935（全体はN=15,246、異性愛者含む） 性的指向：ゲイ302人、レズビアン62人、バイ男性323人、バイ女性248人 性別：625人男性、310人女性 人種：不明 場所：米国	量的研究	・オンライン	目的：LGBが出会いにインターネットをどのように利用しているか明らかにする。 LGB も異性愛者も同様に、性的探求、コミュニティ構築の手段としてインターネットを利用していた。LGBは異性愛者よりもインターネットで知り合った相手と会ったり性的関係を持つことが多かった。長期的な関係を結ぶことも多く、女性は男性より真剣な関係を築くことが多い。インターネットは出会いのスクリーニング手段、実生活での偏見に対する盾として機能している。
19	Morgan & Stevens (2012)	T	年齢：23-61才 M=48	N=6 性的指向：不明 性別・性自認：5人MTFトランスジェンダー、1人MTFクロスドレッサー 人種：白人 場所：米国	質的研究	・面接 ・口コミ	目的：トランスジェンダーのアイデンティティ発達に焦点を当て、トランスジェンダーの生活や経験を明らかにする。 MTFの面接からは、身体と心の不協和に関する初期の感覚、アイデンティティの交渉と管理、移行過程の3つのテーマが確認された。プロセスは幼少期から始まり、移行およびしな知的不快感の解消で終わるが、段階的で発達的であることが示唆された。
20	Ratcliff & Haltom (2021)	LGB	年齢： M=36.9、 SD=11.4	N=1136 性的指向：不明 性別：46%男性、54%女性 人種：76%白人、10%ヒスパニック、7%黒人、7%その他 場所：米国	量的研究	・オンライン ・LGBT成人調査	目的：宗教がカミングアウトに与える影響を明らかにする。 宗教への所属や出席は、カミングアウトに影響を与えない。保守的な宗教（福音派プロテスタント）を信仰し触れる機会が増えると遅い年齢でカミングアウトする。プロテスタント・カトリック信者は無神論者と比較して、カミングアウトに影響を及ぼさない。
21	Real-Quintanar et al. (2020)	T	年齢：22-39才 M=32	N=4 性的指向：不明 性別：トランス男性 人種：不明 場所：メキシコ・メキシコシティ	質的研究	・面接 ・ホルモン治療を受けているクリニックにおける調査	目的：トランス男性のアイデンティティ発達過程における医療ニーズを明らかにする。 幼少期からトランスジェンダーとしてのアイデンティティを発達させ始めたが、その間に医療専門家との有益な関わりを持った者はほとんどいなかった。なんらかのケアを受けた者は肯定的対応ではなく虐待的対応を受けた。専門的なケアに関する情報を入手したのは成人してからだった。
22	Rendina et al. (2019)	GB	年齢：18才以上 M=36.9、 SD=11.4	N=374 性的指向：87.7%ゲイ 性別：男性 人種：50.5%白人、20.3%黒人、13.6%ラテン系、15.5%その他 場所：米国ニューヨーク市	量的研究	・性的強迫症研究のための性的にアクティブなゲイ・バイ男性を対象とした縦断調査	目的：マイルストンとメンタルヘルスとの関係を明らかにする。 性的アイデンティティ発達の早期進行は、成人期における差別経験、感情調節障害、性的強迫性、不安やうつ病のレベルが高くなることを示した。
23	Scheitle & Wolf (2018)	LGB	年齢：18-89才 M=45.24、 SE=0.55	N=1034 性的指向：1002人異性愛者、17人レズビアンまたはゲイ、15人バイ 性別：45%男性、55%女性 人種：79%白人、14%黒人、7%その他 場所：米国	量的研究	・対面あるいは電話面接 ・一般社会調査	目的：宗教が性の流動性に与える影響を明らかにする。 性の流動性について、2.4%が4年間で性的アイデンティティの少なくとも1つの変化を報告した。具体的には、レズビアンまたはゲイ、バイ、および女性が、異性愛者や男性と比較して性的アイデンティティの流動性を示した。宗教の役割に関しては、自身が宗教的だと認識していた者は、その後の性的アイデンティティがより流動的であることがわかったが、これは異性愛者には当てはまらなかった。
24	Testa et al. (2014)	T	年齢：18-53才以上 M=不明	N=3087 性的指向：不明 性別：2178人MTFトランスジェンダー、653人FTMトランスジェンダー、152人MTDG(Male To Different Gender)トランスジェンダー、104人FTDG(Female To Different Gender)トランスジェンダー 人種：80%以上白人 場所：米国	量的研究	・オンライン ・全国トランスジェンダー調査	目的：トランスジェンダーが他のトランスジェンダーと関わることでアイデンティティ発達にどのような影響を与えるかを明らかにする。 MTFおよびFTMトランスジェンダーは、トランスジェンダーだと自認する前に、他のトランスジェンダーの存在を知っていた、あるいは、会ったことがあった者は、自認した時に恐怖心が低く、希死念慮が低く、快適さが高かった。
25	Vaughan & Waehler (2010)	LG	年齢：20-80才 M=41.15、 SD=16.13	N=418 性的指向：52%ゲイ、48%レズビアン 性別・性自認：52%男性、47%女性、1%トランスジェンダー女性 人種：87%白人、5%ラテン系、2%アフリカ系、2%アジア・太平洋系、その他 場所：米国、カナダ	量的研究	・オンライン ・LGBT団体へのメール、チラシ	目的：LGがカミングアウトを行うことによるストレスに関連した成長について明らかにする。 カミングアウトは個人の成長につながるプロセスの一つであるという観点から、カミングアウト成長尺度が開発された。カミングアウト成長は、個人的成長と集団的成長（帰属意識など）の2因子が見出され、カミングアウトによるストレスの経験が成長の機会になることが多いことが示唆された。
26	Williams et al. (2022)	B	年齢：18-59才 M=28、 SD=8.15	N=24 性的指向：バイセクシュアル 性別：14人シス女性、2人シス男性、3人トランスジェンダー、4人ノンバイナリーまたはジェンダークィア、1人クエスチョニング 人種：二重人種、多重人種 場所：米国	質的研究	・電話またはZOOM面接 ・SNS募集	目的：多人種かつバイセクシュアルのアイデンティティ発達過程を明らかにする。 多人種でバイセクシュアルであることが周囲から見えにくい不可視性のため、周囲に理解されない経験、所属する人種/民族グループから抑圧される経験、自身のアイデンティティが厳格なカテゴリーから自身を解放、成長させ、人生にプラスの影響を与えていることなどが語られた。

図表 3　文献要約表（続き）

マイルストン研究およびパーソナリティとの関連

Cass（1979, 1984）や Troiden（1979, 1989）の同性愛者アインデンティティの発達モデルは、直線的かつ段階的に経験されるものだが、その後モデルの妥当性が批判されるようになると（e.g.　Johns & Probst, 2004）、発達上の重要な出来事であるマイルストンの経験年齢やその背景を調査することで多様なパターンやその要因を検討する研究が増えてきた（Dirkes et al., 2016）。マイルストン項目は概ね一定の合意がなされており、①初めて同性に性的に惹かれた年齢、②初めて性的マイノリティだと自認した年齢、③初めて同性と性的経験をした年齢、④初めてカミングアウトした年齢の 4 つの経験年齢が調査されることが多い（Calzo et al, 2012; Dirkes et al., 2016; Grov et al.,2018; Haltom & Ratcliff, 2021; Rendina et al.,2019）。マイルストン研究は、成人期の調査時点の状況に関する研究ではなく、思春期や青年期を回顧して答える研究である。全世代に亘って調査し世代比較を行ったコホート研究では、①初めて同性に性的に惹かれた年齢は、いずれの世代も思春期に通過しており、時代背景や世代の影響が少なくコホート効果は小さかった（Calzo et al, 2012; Floyd & Bakeman, 2006; Grov et al., 2018）。他方、②～④のマイルストンは、高齢コホートは若年コホートより遅い年齢で通過する傾向があった。これは多様性に不寛容だった時代背景における同性愛嫌悪による自認の躊躇やカミングアウトの困難さがあったと考えられる（Floyd & Bakeman, 2006）。さらに、少数ではあるが自認やカミングアウトが 30～40 代と大幅に遅延する例もあるなど、アイデンティティ発達には大きな個人差があることが示唆された（Calzo et al, 2012; Grov et al., 2018）。

こうした個人差をパーソナリティの観点から説明しようとする研究として、性格論のいわゆるビッグファイブ理論における要素の 1 つである「経験に対する開放性」（openness to experience）との関係（Ifrah et al., 2018）、アタッチメント理論における「内的作業モデル」（internal working model）との関係（Elizur & Mintzer, 2001）を調査したものがあった。「経験に対する開放性」は適応的でストレス耐性が高いという特性が知られているが、ゲイ・レズビアンの「経験に対する開放性」と性的指向の自己開示との間には正の相関が示された。また、アタッチメント理論における「内的作業モデル」との関係では、自己受容と安定した大人とのアタッチメントとの間には正の相関が示された。このほか、マイルストンに関連して、インターネットにおける情報収集やコミュニケーションツールが性的アイデンティティの自認や同じ境遇にある他者との出会いといった発達過程に与える影響に関する研究も見られ、特に若年層においてアイデンティティ発達にインターネットが一定の役割を果たしていることが示された（Campbell et al.,2023; Lever et al., 2008）。

メンタルヘルスの問題（ネガティブな側面）と成長・幸福感（ポジティブな側面）に関する研究

性的マイノリティのアイデンティティ発達の研究では、従来、性的マイノリティのメンタルヘルスの問題が喫緊の課題として重視されてきたため、メンタルヘルスの悪化に着目したネガティブな側面に焦点を当てることが多かった（Riggele et al., 2008）。例えば、マイルストンの経験年齢や経験順序と、自殺念慮や性的強迫症などメンタルヘルスの問題との関連を調べた研究では、思春期における早期発達がみられる場合、まだ自らでの対処能力を持たないためにストレスが通常より高まると考えられ、その結果として生涯にわたるメンタルヘルスの悪化との相関が示された（Dirks et al., 2016; Rendina et al., 2020）。

これに対し、性的マイノリティのアイデンティティ発達が与えるポジティブな側面についても焦点を当てようとする研究もいくつか見られた（Ghavami et al., 2011; Halpin & Allen, 2004; Vaughan & Waehler, 2009）。心理的課題（危機）を乗り越えることで成長するという Erikson の発達理論は性的マイノリティ研究でもしばしば参照されるが、Seligman（2002）の提唱するポジティブ心理学の影響も受け、性的マイノリティは、自らの性的アイデンティティを他者に開示するカミングアウトというストレスの経験が成長の機会となることを示唆するものもあった（Vaughan & Waehler, 2009）。

研究蓄積の少ない領域を埋める研究

性的マイノリティのアイデンティティ研究は、Cass（1979）などゲイ白人男性の研究を中心に増加していったが、近年は多様な性的マイノリティの存在が認知されるようになり、ゲイ・レズビアンという同性愛者以外のまだ研究蓄積の多くない領域の研究が見られた。トランスジェンダーは、そのアイデンティティ発達モデルがいくつか提示されているものの（e.g. Bockting & Coleman, 2007）、まだ一定の合意を得ているものはないため（Levitt et al., 2014）、臨床現場で役立つ知見の収集やモデル理論構築を目的として、インタビューによる質的研究がいくつか見られた（Eisenber et al., 2020; Fiani et al., 2019; Katz-Wise et al., 2015; Morgan et al., 2012; Real-Quintanar et al., 2020）。このほか、研究蓄積の少ない領域として、宗教との関係（Ratcliff et al., 2021; Scheitle et al., 2018）、中東アラブ系、アジア系、複数の人種の背景を持つ多人種など人種との関係（Ikizler et al., 2014; Kim & Epistein, 2018; Williams et al., 2022）の研究が見られた。保守色の強い宗教グループ、集団主義や伝統的家族観の強い人種グループは、性的マイノリティに不寛容なことが多いとされるため、性的マイノリティと宗教・文化の両方の属性に所属し続ける方略として、カミングアウトを通常より遅らせていることが示唆された。

Ⅳ　考察とまとめ

以上のレビューの結果から、以下のリサーチギャップが明らかになった。

第 1 に、成人期の発達過程そのものを対象とした研究が少ない点である。今回把握した研究は成人期を調査対象としているものの、思春期や青年期に通過したマイルストンの年齢を回顧して回答するものが大半だった。Erikson の発達モデル研究でもほとんどが青年期を対象としており、成人期の研究は少ないことが指摘されているが（Sneed et al., 2012; Vandewater & Stewart, 2006）、性的アイデンティティ研究についても同様にほとんどが青年期に焦点を当てており、ライフスパンやライフコースの視点をしばしば欠いていることが指摘されている（Floyd & Stein, 2002; Rosario et al., 2006; Savin-Williams & Diamond, 2000）。例えば、トランスジェンダーは、アイデンティティの発達は幼児期から思春期に起こるとされるものの、性別移行は家族関係や経済的障壁の問題から人生の後半に行われることも多い（Katz-Wise et al., 2015）。カミングアウトについては、性的マイノリティのアイデンティティ発達モデルにおける重要なマイルストンの 1 つだが、若い頃にそのマイルストンを経た場合にその後どのようなライフコースを歩むのか、あるいはカミングアウトが成人期以降に行われた場合にはその後どのような発達を経るのかは不明である。さらに近年は、性的アイデンティティは生涯を通じて本質的に安定しているという発達モデルに疑問を投げかけ、性的指向の揺らぎ（sexual fluidity）を支持する研究が増えており、性的マイノリ

ティをめぐる生涯発達に関する研究の意義は高まっている（Diamond, 2003, 2008; Diamond & Rosky, 2016; Katz-Wise & Hyde, 2015; Savin-Williams et al., 2012）。今後の研究が必要な領域であると考えられる。

第 2 に、心理臨床実践の観点からみると、アイデンティティ発達過程における感情面の研究の不足が挙げられる。不安、孤独感、心理的幸福感など感情に関連する尺度を用いた研究は一部見られたものの、マイルストン理論は回顧研究に基づくものが多いという制約があるが、認知面や行動面の調査が重視され、アイデンティティ発達途上における恋愛感情や対人関係などの感情的側面が無視されていることが指摘されている（Saewyc, 2011）。心理臨床の場面において性的マイノリティのクライエントが具体的にどのような過程を歩んでいるのかを認識するだけでなく、その際にどのような感情を抱えているのかを明らかにすることは、メンタルヘルスの問題の予防や心理的支援の面からも重要である。

第 3 に、さまざまな属性を持つ多様な性的マイノリティに関する研究の不足である。今回のレビューでは、こうした不足を埋めるべく宗教や人種などが取り上げられていたが、依然として未着手の領域は多い。また、今回把握した研究のほとんどは米国が対象であり、対象地域の偏りも見られた。今後は、宗教、人種、地域の多様性に加え、障害、病気、貧困、高齢者なども対象となりうると考えられる。こうしたさまざまな属性を有する性的マイノリティの存在は、交差性（intersectionality）という近年注目されている概念と関連しており（Russel & Horn, 2017）、実際今回レビューした研究でも交差性という用語への言及が見られた（Fiani & Han, 2019; Scheitle & Wolf, 2018; Williams et al., 2022）。交差性は性的マイノリティへの心理臨床に携わる者として、米国心理学会のガイドラインにおいても理解することの重要性が指摘されている（APA, 2021）。

最後に、本稿の限界として、文献の選択範囲について英語の査読付き論文のみを対象とし、書籍の章や学会報告などの灰色文献を含んでいない。また、文献の検索範囲について演算子を変更すれば今回の検索結果から外れた文献が浮上し知見を取りこぼしている可能性があるほか、文献の選定においてバイアスが生じている可能性がある。以上の点は、今後の課題である。

引用文献

American Psychological Association (2021). APA Guidelines for Psychological Practice with Sexual Minority Persons.

Bockting, W., & Coleman, E. (2007). Developmental stages of the transgender coming out process: Toward an integrated identity. In R. Ettner, S. Monstrey, & A. E. Eyler (Eds.), Principles of transgender medicine and surgery (pp.185-208). Binghamton, NY: Hayworth Press.

Calzo, J.P., Antonucci, T.C., Mays, V.M., & Cochran S.D. (2011). Retrospective Recall of Sexual Orientation Identity Development Among Gay, Lesbian, and Bisexual Adults. *Developmental Psychology,* **47**(6),1658-1673.

Campbell, C.K., Hammack, P.L., Gordon, A.R., & Lightfoot, M.A. (2023). "I Was Always Trying to Figure It Out… on My Own Terms": Structural Barriers, the Internet, and Sexual Identity Development among Lesbian, Gay, Bisexual, and Queer People of Different Generations. *Journal of Homosexuality*, **70**(11), 2560-2582.

Cass, V. (1979). Homosexual identity formation; A theoretical model. *Journal of Homosexuality*, **4**(3), 219-235.

Cass, V. (1984). Homosexual identity formation; Testing a theoretical model. *Journal of Sex Research*, **20**, 143-167.

D'Augeli, A.R. (1994). Lesbian and gay male development: Steps toward an analysis of lesbians' and gay men's lives. In B. Greene, & G. M. Herek (Eds.), Lesbians and gay psychology: Theory, research, and clinical applications (pp.118-132). Newbury Park, CA: Sage.

David S., & Knight B.G. (2008). Stress and coping among gay men: Age and ethnic differences. *Psychology and Aging*, **23**, 62-69.

Diamond, L. M. (2003). Was it a phase? Young women's relinquishment of lesbian/bisexual identities over a 5-year period. *Journal of Personality and Social Psychology*, **84**, 352–364.

Diamond, L. M. (2008). Female bisexuality from adolescence to adulthood: Results from a 10-year longitudinal study. *Developmental Psychology*, **44**, 5–14.

Diamond, L. M., & Rosky, C. J. (2016). Scrutinizing immutability: Research on sexual orientation and U.S. legal advocacy for sexual minorities. *Journal of Sex Research*, **45**, 363–391.

Dirkes, J., Hughes, T., Ramirez-Valles, J., Johnson, T., & Bostwick, W. (2016). Sexual identity development: relationship with lifetime suicidal ideation in sexual minority women. *Journal of Clinical Nursing*, **25**(23-24), 3545-3556.

Elizur, Y., & Mintzer, A. (2001). A framework for the formation of gay male identity: processes associated with adult attachment style and support from

family and friends. *Archives of Sexual Behavior*, **30**(2), 143-167.
Eisenberg, E., & Zervoulis, K. (2020). All flowers bloom differently: an interpretative phenomenological analysis of the experiences of adult transgender women. *Psychology & Sexuality*, **11**(1-2), 120-134.
Erikson, E.H. (1959). Identity and the life cycle. 小此木啓吾 (訳) (1973). 自我同一性. 誠信書房.
Factor, R., & Rothblum, E. (2008). Exploring gender identity and community among three groups of transgender individuals in the United States: MTFs, FTMs, and genderqueers. *Health Sociology Review*, **17**(3), 235-253.
Fiani, C.N., & Han, H.J. (2018). Navigating identity: Experiences of binary and non-binary transgender and gender non-conforming (TGNC) adults. *International Journal of Transgenderism*, **20**(2-3), 181-194.
Floyd, F.J., & Stein, T.S. (2002). Sexual orientation identity formation among gay, lesbian, and bisexual youths: multiple patterns of milestone experiences. *Journal of Research on Adolescence*. **12**(2), 167–191.
Floyd, F.J., & Bakeman, R. (2006). "Coming Out Across the Lifecourse: Implications of Age and Historical Context." *Archives of Sexual Behavior*, **35**, 287-96.
Frost, D.M., Lehavot, K., & Meyer, I.H. (2013). Minority stress and physical health among sexual minority individuals. *Journal of Behavioral Medicine*, **38**(1), 1–8.
Gardner, A.T., de Vries, B., & Mockus, D.S. (2014). Aging out in the desert: Disclosure, acceptance, and service use among midlife and older lesbians and gay men, *Journal of Homosexuality*, **61**, 129-144.
Ghavami, N., Fingerhut, A., Peplau, L.A, Grant, S.K., & Wittig, M.A. (2011). Testing a model of minority identity achievement, identity affirmation, and psychological well-being among ethnic minority and sexual minority individuals. *Cultural Diversity & Ethnic Minority Psychology*, **17**, 79-88.
Grov, C., Rendina, H.J., & Parsons, J.T. (2018). Birth Cohort Differences in Sexual Identity Development Milestones Among HIV-Negative Gay and Bisexual Men in the United States. *Journal of Sex Research*, **55**(8), 984-994.
Halpin, S.A., & Allen, M.W. (2004). Changes in psychosocial well-being during stages of gay identity development. *Journal of Homosexuality*, **47**(2), 109-126.
Haltom, T.M., & Ratcliff, S. (2021). Effects of Sex, Race, and Education on the Timing of Coming Out among Lesbian, Gay, and Bisexual Adults in the U.S. *Archives of Sex Behavior*. **50**(3), 1107-1120.
Hatzenbuehler, M.L., McLaughlin, K.A., & Nolen-Hoeksema, S. (2008). Emotion regulation and internalizing symptoms in a longitudinal study of sexual minority and heterosexual adolescents. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **49**(12), 1270–1278.
平田俊明 (2014). レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル支援のための基本知識. 針間克己・平田俊明 (編). セクシュアル・マイノリティへの心理的支援. 岩崎学術出版社, pp.26-38.
Ifrah, K., Shenkman, G., & Shmotkin, D. (2014). How does sexual orientation relate to openness to experience in adulthood. *Personality and Individual Differences*, **131**, 164-173.
Ikizler, A.S., & Szymanski, D.M. (2014). A Qualitative Study of Middle Eastern / Arab American Sexual Minority Identity Development. *Journal of LGBTQ Issues in Counseling*, **8**(2), 206-241.
石丸径一郎 (2022). LGBTQ+の生きづらさとメンタルヘルスの諸課題. 精神医学, **64**(8), 1069-1073.
Johns, D.J., & Probst, T.M. (2004). Sexual minority identity formation in an adult population. *Journal of Homosexuality*, **47**(2), 81-90.
葛西真記子 (2023). 心理支援者のための LGBTQ+ハンドブック—気づき・知識・スキルを得るために. 誠信書房.
Katz-Wise, S.L., & Budge, S.L. (2015). Cognitive and interpersonal identity processes related to mid-life gender transitioning in transgender women. *Counseling Psychology Quarterly*, **28**(2),150-174.
Katz-Wise, S. L., & Hyde, J. S. (2015). Sexual fluidity and related attitudes and beliefs among young adults with a same-gender orientation. *Archives of Sexual Behavior*, **44**, 1459–1470.
Kim, H., & Epstein, N.B. (2018). Dual-Identity Development, Discomfort in Racial/Ethnic Community, and Well-Being of Asian American Sexual Minorities. *Journal of LGBT Issues in Counseling*, **12**(3), 176-192.
Lever, J., Grov, C., Royce, T., & Gillespie, B.J. (2008). Searching for Love in all the "Write" Places: Exploring Internet Personals Use by Sexual Orientation, Gender, and Age, *International Journal of Sexual Health*, **20**(4), 233-246.
Levitt, H., & Ippolito, M.S. (2014). Being Transgender: The Experience of Trans- gender Identity Development. *Journal of Homosexuality*, **61**(12),1727-1758.
Martin, C. L., Ruble, D. N., & Szkrybalo, J. (2002). Cognitive theories of early gender development. *Psychological Bulletin*, **128**, 903–933.
宮腰辰男 (2012). セクシュアル・マイノリティを生きるということ—同性愛者がセクシュアリティを受け入れるプロセス—. 大正大学カウンセリング研究所紀要, **35**, 63-77.
Money, J. (1988). Gay, straight, and in-between: The sexology of erotic orientation. New York, NY: Oxford University Press.
Morgan, S.W., & Stevens, P.E. (2012). Transgender identity development as represented by a group of transgendered adults. *Issues in Mental Health Nursing*, **33**(5), 301-308.
Morrow, D.F. (2001). Older gays and lesbians: Surviving a generation of hate and violence. *Journal of Gay & Lesbian Social Services: Issues in Practice, Policy & Research*, **13**(1-2), 151-169.
Meyer, I.H. (2003). Prejudice, Social Stress, and Mental Health in Lesbian, Gay, and Bisexual Populations: Conceptual Issues and Research Evidence. *Psychological Bulletin*, **129**(5), 674-697.
岡本祐子 (1994). 成人期における自我同一性の発達過程とその要因に関する研究. 風間書房.
沖田勇帆・廣瀬卓哉・長 志保・高瀬 駿・岸 優斗 (2021). JBI Manual For Evidence Synthesis: Scoping Reviews 2020. スコーピングレビューのための最新版ガイドライン（日本語訳）. 日本臨床作業療法研究, **8**, 37-42.
Pachankis, J.E., Rendina, H.J., Restar, A., Ventuneac, A., Grov, C., & Parsons, J.T. (2015). A minority stress -emotion regulation model of sexual compulsivity among highly sexually active gay and bisexual men. *Health Psychology*, **34**(8), 829–840.
Ratcliff, S.M., & Haltom, T.M. (2021). The Proverbial Closet: Do Faith and Religiosity Affect Coming Out Patterns? *Social Currents*, **8**(3), 249-269.
Real-Quintanar, T., Robles-García, R., Medina-Mora, M.E., Vázquez-Pérez, L., & Romero-Mendoza, M. (2020). Qualitative Study of the Processes of Transgender-Men Identity Development. *Archives of Medical Research*, **51**(1), 95-101.
Rendina, H.J., Carter, J.A., Wahl, L., Millar, B.M., & Parsons, J.T. (2019). Trajectories of sexual identity development and psychological well-being for highly sexually active gay and bisexual men: A latent growth curve analysis. *Psychology of Sexual Orientation and Gender Diversity*, **6**(1), 64-74.
Riggle, E.D.B., Whitman, J.S., Olson, A., Rostosky, S.S., & Strong, S. (2008). The positive aspects of being a lesbian or gay man. *Professional Psychology: Research and Practice*, **39**, 210–217.
Rosario, M., Schrimshaw, E.W., Hunter, J., & Braun, L. (2006). Sexual identity development among lesbian, gay, and bisexual youths: Consistency and change over time. *Journal of Sex Research*, **43**, 46–58.
Rosario, M., Schrimshaw, E.W., & Hunter, J. (2011). Different patterns of sexual identity development over time: Implications for the psychological adjustment of lesbian, gay, and bisexual youths. *Journal of Sex Research*, **48**, 3-15.
Russel, T.S., & Horn, S.S. (2017). Sexual Orientation, Gender Identity, and Schooling. The nexus of research, practice, and policy. Oxford University Press.
Savin-Williams, R.C., & Diamond, L.M. (2000). Sexual identity trajectories among sexual-minority youths: Gender comparisons. *Archives of Sexual Behavior*, **29**, 607–627.
Savin-Williams, R. C., Joyner, K., & Rieger, G. (2012). Prevalence and stability of self-reported sexual orientation identity during young adulthood.

Archives of Sexual Behavior, **41**, 103–110.
Saewyc, E.M. (2011). Research on adolescent sexual orientation: development, health disparities, stigma, and resilience. *Journal of Research on Adolescence*, **21**(1), 256–272.
Scheitle, C.P., & Wolf, J.K. (2018). Religion and Sexual Identity Fluidity in a National Three-Wave Panel of U.S. Adults. *Archives of Sexual Behavior*, **47**(4), 1085-1094.
Seligman, M.E.P. (2002). Positive psychology, positive prevention, and positive therapy. In C. R. Snyder & S. J. Lopez (Eds.), Handbook of positive psychology (pp. 3–9). New York: Oxford University Press.
Shilo, G., & Savaya, R. (2012). Mental health of lesbian, gay, and bisexual youth and young adults: Differential effects of age, gender, religiosity, and sexual orientation. *Journal of Research on Adolescence*, **22**, 310-325.
Starks, T.J., Grov, C., & Parsons, J.T. (2013). Sexual compulsivity and interpersonal functioning: sexual relationship quality and sexual health in gay relationships. *Health Psychology*, **32**(10), 1047–1056.
Testa, R.J., Jimenez, C.L., & Rankin, S. (2014). Risk and Resilience During Transgender Identity Development: The Effects of Awareness and Engagement with Other Transgender People on Affect. *Journal of Gay & Lesbian Mental Health*, **18**(1), 31-46.
友利幸之介・澤田辰徳・大野勘太・高橋香代子・沖田勇帆 (2020). スコーピングレビューのための報告ガイドライン日本語版:PRISMA-ScR. 日本臨床作業療法研究, **7**, 70-76.
Troiden, R.R. (1979). Becoming homosexual: A model of gay identity acquisition. Psychiatry. *Journal for the Study of Interpersonal Processes*, **42**, 362–373.
Troiden, R.R. (1989). The formation of homosexuality identities. *Journal of Homosexuality*, **17**, 43-73.
Vaughan, M.D., & Waehler, C.A. (2009). Coming Out Growth: Conceptualizing and Measuring Stress-Related Growth Associated with Coming Out to Others as a Sexual Minority. *Journal of Adult Development*, **17**(2), 94-109.
Williams, D., Bartelt, E., Thomas, B., Guerra-Reyes, L., Carspecken, L., Rosenstock Gonzalez, Y.R., Klimek, S., & Dodge, B. (2022). Beyond the Boundaries: Exploring the Identity-Related Experiences of Biracial/Multiracial and Bisexual Adults. *Archives of Sexual Behavior*, **51**(4), 2241-2259.

本研究は、JST 次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP2110 の支援を受けたものです。